

する事を裏付けるものは、受信空中線の高度角の変化である。第5図(イ)、(ロ)は、前節で述べた方法により計算した平均上昇速度と、受信空中線の高度角を対比させたもので、前者のピーク点と、後者のキック点がよく一致している事が判る。

次に、この現象の規模を見るため、全国高層観測官署より3月1日より10日までの資料を頂いて調べた所、この期間中このような現象は、仙台で1日21時～2日09時、5日09時～7日09時、10日09時に見られ、秋田でも5日21時～7日09時、9日09時に見られたが、他の官署ではそれ程目立った現象は見られず、現象その物は相当局所的なものと考えられるが、原因については結論を得ていない。尚、一般に高温域の下では、上昇速度は遅くなり、上では速くなっていたが、いくつかの例外もあり断定は出来なかった。

4. むすび

ゾンデ2個の同時観測及びエコー方式により得られた資料及び、仙台、秋田で観測された資料より、ゾンデ上昇速度の変化は実在するものであると考えられるが、そ

の原因は解明出来ず、今後更に調査を進める必要がある。

終りに、貴重な資料を頂いた全国高層観測官署の方々、並びに、色々と御指導して下さいました乳井課長に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 角 俊治 (1958) 気球の上昇速度について、高層気象台年報, Vol. 6, No. 2, 981.
- 2) 角 俊治 (1961) 気球の上昇速度と鉛直気流, 高層気象台年報, Vol. 7, No. 1, p. 9.
- 3) 角 俊治 (1962) 台風周辺における気球の上昇速度の分布, 高層気象台年報, Vol. 7, No. 2, p. 103.
- 4) T. Kitaoka (1963) Some Considerations on the Stratospheric Circulation, related to the Cause of the Aleutian High. Proceeding of the International Symposium on Stratospheric and Mesospheric Circulation.
- 5) 浅井富雄 (1968) ゾンデ観測資料を用いた対流活動の解析, 天気, Vol. 15, No. 3, p. 109.

夏期月例会お知らせ

(気象学史と気象教育)

1. 期 日：8月27日(火)
2. 会 場：気象庁第3会議室(予定)

講演申込みは6月末日まで気象庁図書館英男宛申込まれたし、なお今回は、シンポジウムのテーマとして「岡田以前の気象学、気象事業」が予定されています。